I14
J3-22

世界動物文学全集

22

野性の巨象

I14
J3-22

110617

日文 701707690

[illegible]文学全集

22

淮外国语学院图书馆 藏书

埼玉県立熊谷図書館
消印
埼玉県立図書館
80145
蔵書

講談社

世界動物文学全集22　野性の巨象

昭和55年8月18日　第1刷

著者　イアン・ダグラス-ハミルトン
　　　オリア・ダグラス-ハミルトン

訳者　藤原英司

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112

電話東京（03）945-1111（大代表）振替東京8-3930

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

定価　1780円

© 藤原英司　1980年　printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

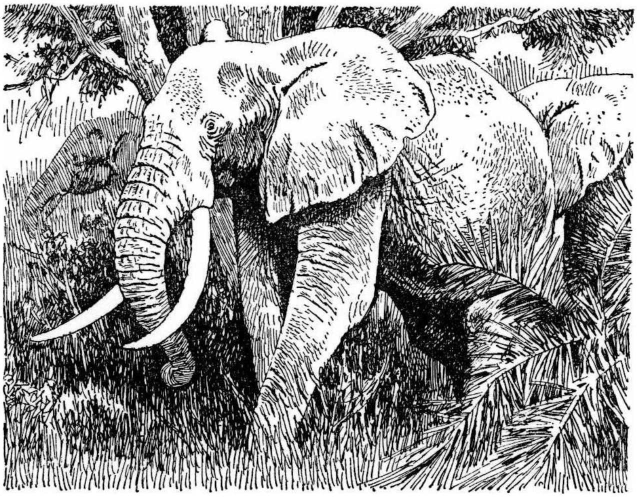
0397-405225-2253（0）　（文2）

目次

野性の巨象　5
解説・藤原英司　320

装幀　蟹江征治
イラスト　田中豊美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook



野性の巨象

イアン・ダグラス－ハミルトン
オリア・ダグラス－ハミルトン
藤原英司訳

AMONG THE ELEPHANTS

by

Iain & Oria Douglas-Hamilton

Copyright © 1975 by Wytham Publications Ltd.
© 1975 Foreword Niko Tinbergen FRS
Japanese translation rights arranged
with William Collins Sons & Co. Ltd.
through Japan UNI Agency, Inc.

まえがき

英国学士院会員　ニコ・ティンバーゲン(1)

本書はじつにみごとな、すばらしい本である。そして本書の著者も、また本書と同様、まことに特異な夫婦である。書きかたは読む者をあかせぬ自然な語りかたで、著者夫婦の研究テーマとの深いかかわりを明らかにしている。またそれだけでなく、かれらの東アフリカへの愛着をもよく言いあらわしている。さらにまた、かれらはその文章によって科学的発見の経緯を述べるとともに、勇気と冒険や不撓不屈さ、そして、おそらくはなによりも〝人生の喜び〟といったものを書きあらわした。二人が書いた文章を読むと、気楽で楽しい長期のサファァリの物語を読んでいるように思え、数々の事件は、単にかれらの体験に趣をそえているだけのように思われる。だが、わたしは二人の体験が、けっしてスムーズなものではなかったことを、知りすぎるほど知っている。これは、わたし自身が、ごくわずかではあったが、かれらとともにアフリカにいたからだ。二人はゾウというアフリカにすむ巨大な野生動物との長い冒険旅行をしたわけだが、わたしはその著者夫婦の生活に、じっさいにかかわった。したがって、この機会に、著者夫婦の物語の背後にある物語――つまり、このスコットランドの青年とフランス系イタリア人の妻とが、共同でこの仕事をするにいたった風変わりな経過について、二言、三言書いてみたい。本書は若い夫婦の共同著作であり、要領よくまとめられ、生き生きと、しかし控えめに、むしろ内気なといってもいい書きかたになっている。

イアン・ダグラス－ハミルトンは、大学院の研究生として、因襲にとらわれない研究にとりかかった。わたしは、そういう彼を見、また彼が自分で研究すべき問題について手探りですすむのを見た。また、時には、どうにもこえがたい障害にぶつかって、長い間苦闘する彼の姿に接した。さらに彼はこの研究によって博士論文を審査する二人のきびしい審査員を満足させる論文を書こうとしていた(最初、その成功のチャンスは、きわめてわずかのように思われた)。わたしは何年間も、彼の成功のチャンスについて心配しつづけた。わたしにとって、これらの体験は、じつに顕著な教訓となった。もちろん、人は学問的指導者としてふるまわねばならぬ時、不安を覚えるものである。そして自分の弟子が研究をちゃんとなしとげてくれると、いつも、ほっと安堵の吐息をつく。だが、イアン・ダグラス－

ハミルトンの物語は、わたしにとって、特別深い意味をもっている。なぜなら、彼のケースは、若者の真の潜在能力を正確に評価することが、いかに困難なことかということを、わたしに思い知らせたからである。さらにまた、こういう思いにも、わたしをかりたてる。つまり、若者の弱点にこだわりすぎることによって、若者の隠れた能力に注目しそこない、その若者の成功にとって決定的な役割をはたすかもしれないような精神的な支持を与える役目を、われわれがいかに簡単に放棄しがちかということである。

オックスフォード大学での学士課程在学中のイアンについて言えば、彼はわたしの学部にあまり関係せず、わたしと彼とは遠く離れた影の薄い関係にすぎなかった。なんとも当惑することではあるが、これは事実である。大学院での研究を指導するようになると、学士課程での教育より、学生との接触は、もっと深くなる。だが、その時にも、わたしは、イアンのうちに、とくに他の学生と異なったところは認めなかった。のみならず、彼の生来の内気さが、進んでわたしに近づこうとするのをはばんでいた。もっとも、のちには、わたしたちは、たがいによく似かよった心を持ちあわせていることをじゅうぶんに認識するようになった。正直に言えば、動物学部というのは、イアンにとっては、スコットランドでの登山と同じくらい魅力のとぼしいものだったことは、どうやらまちがいないようだ。

わたしがイアンをよく知るようになったのは、彼がセレンゲティでジョン・オウイン博士の臨時助手としてしばらく働いてから、二人の友人といっしょに帰ってきた時だった。ある日、三人は、あふれるばかりの熱意に満ちて、わたしたちのオックスフォードの家へ訪ねてきた。アフリカについて、それまでわたしは話に聞いたことしかなかったが、三人はそのアフリカで過ごした休暇が、どんなに興奮に満ちたものだったかを、わたしたちに話した。三人は、全員が熟知するようになったアフリカの土地のカラー・スライドを見せた。かれらは三人とも明らかにアフリカへもどろうと決心しているようだった。だが、三人は、まだその前に、やっかいな障害をこえなくてはならなかった。その障害というのは、三人とも正確にはどんなものかまだ知らなかったが、オックスフォードでさらに一年過ごし、わたしたちの動物学部での最終試験を受ける準備をしなくてはいけないのだった。しかもその最終試験というのは、そうとう厳格なものだった。

イアンは、この障害をみごとにのりこえて、わたしに会いにきた。わたしは彼の計画を聞いた時、いささか不安を覚えたことを告白しなくてはならない。彼は博士号を得るための研究計画を説明したが、それは東アフリカへもどり、なにもかも自分でやるというもので、とても実現できそうもないものに思われた。いうなれば、彼は自分が取り組もうとしている計画がどんなものかということが、よくわかっていないようだった。彼がやろうとしている研究の

舞台は東アフリカで、研究対象はゾウという大型哺乳類なのだ。彼はその動物に注意をひかれていたというより、ほとんど憑かれていたといってもいい。いったい、わたしには、彼の野心を満足させる手助けができるのだろうか？　それでもなおかつ、わたしは手助けしてみるべきなのか？　セレンゲティ調査研究所は、そのころすでに設立されていた。そして経験を積んだ適任の野外研究員が何人も着任していた。そこにはイアンの夢を実現するための空席も資金も、なさそうだった。

　イアン自身が語っているように、彼の研究をスタートさせたのは、ジョン・オウイン博士と英国学士院である。そして彼の記述から明らかなとおり、その他じつに多くの人びとが彼を支え導き、そしてその援助がいかに重要なものであったか、それは彼がじゅうぶんに感謝して述べているとおりである。

　英国学士院リーバヒューム奨学金は、彼に一年間のテスト期間を与えた。そのあとで、二つの問題がおこった。一つは母校の大学で彼の研究計画を承認するかどうかということで、もう一つは、さらに研究資金が調達できるかどうかということだった。この二つは、その研究員が、テスト期間の一年間に、どれだけの実績をあげたかということに、すべてかかっている。

　彼は根拠地を注意深くえらび、ンダーラー河の上流の滝近くの、息をのむような美しい場所を根城にして、孤独のうちに一年間、作業をすすめた。そして最初の一年の末に結果を提出したが、それは、かろうじて先の見込みがあるというていどの結果にすぎなかった。しかし、そこには、ばくぜんとしたなにかがあった。とにかく自信のほどを秘めた強く訴えてくるもので、言うなれば魅力的な頑固さといったようなものだ。そして、（今だからわれわれはそういえるのだが、運よく）彼は研究をつづける手段に恵まれた。本国でわたしたちが不安を覚えていたことは、否定できない。時どき、彼の性格の冒険的な面が優勢になるように思われた。（噂に聞くように）彼はあまりになんでも、むこうみずにやりすぎるのではなかろうか？　そして、われわれが、これは危なっかしい危険に満ちた仕事と考えているものについて、われわれ自身が責任を引き受けたことは、はたしてよかったのか？　研究をすすめるには組織的に、たゆまず、必要な調査をやりつづけなくてはならないが、彼は、それをおちついて始めただろうか？　彼は自らをむしばむ孤独に耐えることができるだろうか？　また、彼はセレンゲティにいる仲間たちと科学的な接触をじゅうぶんに保っているだろうか？　彼はビルハルツ住血吸虫に悩まされていたが、その猛烈な攻撃や、いらだった二頭のサイとの危機一髪の冒険。〃トローン姉妹〃――これは頑強な牙をつけた怒りっぽい四頭の雌ゾウだが――の危険な突撃。イアンが自分のゾウ群に徒歩で忍び寄るというやりかた（〃よく踏みならされたゾウの通り道を、こっそりと

歩くのに優る喜びはない〃と彼は書いているが）――これらすべてのことが、わたしたちの不安を増した。だが、ひとつには幸運から、またひとつには、彼のすぐれた判断力によって、イアンはともかく生きのびた。

彼はまた、経験を積んだ科学者たちの忠告をとりいれ、彼自身がよい聞きてであることを立証した。また、彼は技術的な考案力の点でも能力をみせた（個々のゾウの大きさや年齢を記録した独創的な写真による方法を見ていただきたい）。彼は個々の動物を、そのごくささいな生まれながらの差によって見わけるにあたり、自分のきわだった能力を最大限に利用する方法を体得した。そのうえ、彼はすぐに自分のゾウたちと〃かかわりあう〃ようになった。そして彼が見わけられるようになったいくつかのゾウの〃家族単位〃とともに、文字どおり、その中にまじって暮らした。

ヒュー・ランプレー博士とわたしが、共同で彼の学問的指導者になるよう指名され、二人で何回か彼とともに過ごした。また彼自身もたびたびイギリスへやってきた。これは、彼が得た結果を討議し、先の計画をねるためだった。そして、彼の仕事は、しだいに魅惑的な展開をみせはじめた。

本書の第一部と第三部には、彼が発見したことの要旨が記されている。彼は〃単なる〃観察とはいえ長期にわたって知的観察をおこなった結果、アフリカゾウの驚くべき社会生活について、どれほど多くのことを知るにいたったかを、ひとつ、ひとつ順を追って示している。彼が知ったのはゾウの社会生活だけではない。ゾウとゾウの生息地との関係について、また、ゾウの知能や、家族単位内で若いメンバーとして子ゾウが長年暮らすうちに蓄積していく驚くべき知識について多くのことを学んだ。さらにまた、保護する動物の生存数の適切な管理計画をたてるにあたって、考慮にいれるべき多くの要因を、彼がいかに学んだかが書かれている。そしてゾウの保護という問題が、まもなく彼の主要な関心事となった。

だが、彼の野外研究がどれほどうまく進んでいても、彼の先輩の友人たちは、彼がもうひとつの障害を克服しなければならないことを、けっして忘れてはいなかった。つまり、博士の学位を得るためには、最終的に彼の研究の結果を、印刷物の形で完成しなければならなかった。それには、オックスフォードへもどらなくてはならない。研究室のデスクに座り、データの分析のために長くつらい作業を、自分自身に課すのだ。データは適当に配列し、吟味し、文章に書き、生物学的な関連を明らかにしなければならない。だが、彼にとって、今や、オックスフォードより、マンヤラのほうが、ほんとうの居住地になっていた。彼はアフリカのその場所と、そこでの気ままな生活を愛していた。かつて、わたしたちは、暑い日ざしのもとで延々五時間にわたって、粘りつく黒い泥土の穴に落ちたランド

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ローバーを引きあげようと奮闘したことがあった。その時、わたしたち四人は、まる裸で、つめたい澄んだエンダバッシュ河の流れにはいって、腰をおろした。わたしたちが、まるでフロにはいった赤ん坊のように、楽しげに水しぶきをあげていると、近くの藪からゾウの一群が、音もなく現われた。ゾウたちは、わたしたちをよく見ようと、河岸をゆっくりくだってきた。そして(たぶん、わたしたちのことを、なにかへんなヒヒだとでも思ったのだろうが)ゾウたちは、自分たちだけでたっぷり水浴びをするために、ゆっくりと河原を横切っていった。その時、イアンがうれしそうにいった言葉は〝これこそエデンの園ですよ!〟だった。わたしも心からそのとおりだと思った。だが、また、わたしは、こういぶかった――〝彼はいったいオックスフォードでの生活に耐えられるのだろうか?〟

だが、わたしたちの心配は無用だった。その時がくると、彼はやってきた。そしてみごとになしとげた。彼にとって、無数のデータを分析し、グラフを描き、地図の上に記すというやっかいな仕事は、どれほどいやなものだったかしれない。また、その期間中、彼はどれほど、ンダーラーの本拠へもどりたいと強く願っていたことだろう。そして、これらのたえまない辛苦の日々、彼に心からの支援を与えたのは、彼の妻オリアだった。

ついに、二人の厳しい審査員の詰問にさらすため、論文を提出する日がやってきた。審査員二人は、いずれも論文が高いレベルのものであることを要求していた。論文についての質問面接がおこなわれた二時間のあいだ、彼の多くの友人たちは、気をもみつづけた。しかし、じっさいには、予想どおり、審査員は彼の研究を承認し、それが〝われわれの知識にオリジナルな貢献をした〟ものと認めた。イアンはこうして、その部屋から〝哲学博士(オックスフォード大)〟という学問的に完全に羽の生えそろった研究員として出てきた。あとは教授会の承認を残すのみとなり、彼はみごとに自分の能力を実証してみせたのだ。イアン夫妻は、ワイタムの家で陽気なパーティをやったあと、すばやく荷物をまとめ、二週間以内にアフリカへ帰っていった。

ダグラス－ハミルトン博士は、自分が研究した四百余頭のマンヤラのゾウについてさえ、自分の研究が完全なものだとはいっていない。彼の研究は、明らかに叙述的であり、説明的なものである。彼の研究は多くの貴重なデータを提供している。しかし、同時に多くの新しい疑問を提起している。たとえば、彼はそれぞれのゾウの個性には、顕著なちがいがあることを書いている。そして子ゾウと母ゾウ、および年上の若ゾウとの間にひんぱんにというより、継続的に相互作用があることを、くわしく興味深く述べている。また、彼が立証することはできなかったが、子ゾウが長年依存した生活をおくり、経験をつんだ年上のものとつきあうことによって、じつに多くのことを学ぶということ、つまり年上のゾウの影響について、正確に描写してい

る。成体と亜成体が、子ゾウに援助と指導を与えるという発見は、彼のきわだった数々の発見のうちのひとつである。ゾウたちは、有名な本『エレファント・ビル』(2)よりも、明らかにずっと高い知能をもった高度に協力的な動物で、たとえばクジラやイルカと同等のものであることが、明らかになった。たとえば、ライオンに殺された孤児の子ゾウの話を読むと、家族単位との連係が子ゾウにとっていかに必要欠くべからざるものであるかが、はっきりする。

ここ十年間に大型哺乳類についての研究は増大し、いくつもの本が発行されているが、本書に書かれ、また彼の論文に記された業績は、それらの刊行物の中で正当な地位を占め、また、今後の研究にしっかりした基盤を提供するものとなるだろう。二人の著者は、また、科学的観察者の純粋に知的な好奇心が、情緒的かつ個人的な対象との深いかかわりあいと結びつくことが、いかに重要であるかを、われわれに示している。〝国立公園政策において感情のはいりこむ余地はないというパーカーの意見に、わたしは心底不賛成である〟と、イアンは書いている。さらに彼は、ある雌ゾウ（この雌ゾウに彼はいみじくもボーディシア(3)と名づけたが、このゾウは、終始一貫、彼に敵意と恐怖の入りまじった態度をみせた）の行動を描写する時、深い思いやりをもってこう書いている。〝あれほど、わたしたちを嫌い恐れるからには、ボーディシアは人手によってどれほど恐ろしいめにあわされたかわからないと、わたしはよく考えたものだ〟このような記述は、彼が対象と感情的に深くかかわっていることを表わしているが、このようなものがなければ、誰もこの種の研究をすすめる不撓不屈さをもちえないだろう。このことは強調しておく値うちがある。

今までのところ、わたしは、二人の著者のうち、おもに一人のことを語ってきた。彼と同類の人びとと同じく、彼が生涯の伴侶である妻にどれほど多くのおかげをこうむっているかということを、わたしは強調しておきたい。このことは、この研究に着手し、それをなしとげた彼の業績を小さくするものではない。他の多くの人びとは彼のことを単に変わった男と思ったかもしれないが、その時、彼の妻のオリアは、彼を勇気づけ、多大の支援を与えた。本書の第二部は、妻オリアが書いており、彼女はじつに生き生きと、また自然に、どうやって彼女がイアンといっしょになったかを書いている。イアンのマンヤラにおける生活や研究のようすを読む者は、誰でも、妻が書いたこの第二部が、控えめでじゅうぶんに語りつくされていないことを知るだろう。だが、彼の妻は、われわれの賞賛を十分に受けるに値する人である。アフリカのもっとも威厳にみちた、そして同時にこよなく愛すべき哺乳動物の伝記作者たちの間に、彼女は夫とともに、その位置を占めることになった。

最後に、このまえがきをしめくくるにあたって、一連の警告の言葉を述べておきたい。本書の著者二人は、野生の

ゾウと驚嘆すべき交友関係を結んだが、この事実をゾウ一般にあてはめて考えることは、きわめて危険である。どこでも、誰でも、野生のゾウに近づく時は身体と生命との深刻な危険をともなうものであることを知らねばならぬ。南アフリカのクルーガー国立公園では"Pas op!—— olifante is gevaarlik"といわれている。これは"注意！ ゾウは危険"ということだが、このことは今も変わっていない。この警告が要求されるというまさにその事実が、ダグラスーハミルトン夫妻の業績を、たぐいまれなものとしているのである。この世界で最大の陸棲動物の信用を忍耐強くかちえたこと、そしてそれを通じて、かれらのほんとうの生きかたについて、じつに多くのこまかい事実を発見したことが尊い。かれらが発見したゾウのほんとうの生活とは、われわれがアジア種のゾウで見ているような、サーカスでの生活や、時には動物園での生活のように哀れな、屈辱的といってもいいようなものではなく、それよりはるかに威厳に満ちたものだ。願わくば、本書が全世界の読者の考えを変えさせ、ニエレレ大統領がアルーシャ宣言(4)の中に書いている意向の実現をはかる試みを、積極的に支持する必要性を感じさせるものとなってくれることを。大統領の宣言は、明らかに、ダグラスーハミルトン夫妻の研究と、ここに書かれた呼びかけの文章に天啓を与えているからである。

(1) Niko Tinbergen オランダ生まれの動物学者。レイデン大学を経て、イギリスのオックスフォード大学教授となった。研究室、および野外で動物の行動に関するさまざまの研究をおこなったが、なかでも有名なものは、トゲウオの行動の研究とセグロカモメの行動研究。わが国に紹介されている主著は "Social Behaviour in Animals" (1953) Metheun—邦訳『動物のことば』(渡辺・日高・宇野訳、みすず書房、一九五五年) *"The Herring Gull's World" (1953) Collins—邦訳『セグロカモメの世界』(安部・斎藤訳、思索社、一九七五年) *"The Study of Instinct" (1951) Oxford Univ. Press—邦訳『本能の研究』(三共出版)がある。一九七三年に、ローレンツ、およびフリッシュとともにノーベル生理・医学賞を受賞した。

*印をつけたものは、著者が参考文献の中に収録しているものであることを示す。重複を避けるため、訳注の中にかかげた文献で著者の文献表のものと同じものは、巻末の参考文献表から除いた。

(2) J.H. Williams の著書 *"Elephant Bill" (1950) をさす(邦訳『ビルマの象』大島正満訳、法政大学出版局、一九五四年)。ウィリアムズは一九五三年に、同じくゾウを主題とした書物 "Bandoola" Hart Davis—邦訳なし—を書いている。また、ウィリアムズの妻(Susan Williams)は夫とゾウと自分とのビルマでの体験を一冊の本にまとめている。"The Footprints of Elephant Bill" (1962) David Mckay Co.—邦訳なし。

(3) Boadicea 古代ブリトン人イケニ族の女王で、ローマ

軍の暴力的支配に反抗したが、敗れて最後に服毒自殺をとげた。日本の歴史書では、ボアディケアの表記をとっているものが多いが、ここでは英語読みに準じた。正確な英語読みは、ボウアディシーア、またはバウアディシア。
（4） 本書第18章の末尾に、アルーシャ宣言が記されている。

著者の覚え書き

本書の中で、妻オリアとわたしは、探検の実感を読者に伝えようと思った。つまり、わたしたちがゾウの世界に踏みこんで得た興奮と、その報酬ともいうべき成果を書いた。

一九六五年に、わたしは大学を出たばかりの無経験な動物学徒として、マンヤラ湖のゾウを研究するために招かれてアフリカへ渡った。というのは、当時マンヤラ湖では、ゾウのことが〝緊急の問題〟となっていたからである。ゾウの生態――つまりゾウと環境との関係――を研究することであったが、このことは、すぐにわたしをかれらのくわしい社会行動の研究へとかりたてた。ゾウの社会行動というのは、そのころ、ごくわずかしか知られていなかった。だが、わたしがゾウを生き残らせる手がかりを真剣に考えるようになってから、研究分野は拡大された。そして、ゾウの生態学とゾウはどのようにして生き残れるかという問題は、人間がどのような確信をもち、どうふるまうかということと関連して考えることによってのみ可能だということ

とがわかったのである。

本書の第一部では、わたしがマンヤラについた時、自分の心にあったいろいろな考えを述べた。これらの思いは、すぐに錯綜した疑問の網となって心におおいかぶさった。そして、それらの疑問のいくつかに、わたしは、自分の研究期間中に答えを見つけたいと思った。最初の三年間、わたしは一人でゾウたちの間で暮らした。それからオリアが、わたしといっしょになった。

第二部では、オリアが、マンヤラへ到着する前後のことと、叢林でのわたしたちの生活を書いている。この書きかたは、用心深い科学者には禁じられているもので、彼女はそれをあえて無視して書いた。そしてこの第二部に、彼女は、マンヤラでのわたしたちの生活を、最後のところまで書いている。

第三部でわたしは、自分が第一部で直面し、またオリアとわたしがさらに第二部で検討した多くの疑問に、くわしく答えた。

わたしたちの本は個人的な物語であり、ゾウの行動や生物学についての広範な指導書にしようとしたものではない。わたしのことに触れてある他の人びととの研究についても、本書に書いた。だが、わたしは、アフリカゾウについてなされたすべての研究を公平にとりあつかうことはできなかった。

わたしたちが書いたことの基礎となった諸事実は、わたしの論文に記録してある。その論文は科学者のために書かれたもので、現在、オックスフォード大学のボドレアン図書館(1)に所蔵されている（なお、この論文は近々、東アフリカ野生生物学雑誌(2)に提載されることになっている）。本書『野性の巨象』は、一般の読者のために書かれた。

思うに、わたしが四年半にわたってマンヤラでおこなった研究と、他の人びととの研究はいずれも実地踏査による研究で、明らかにこうした探検的な研究のみが、今まで不明確であった未知の領域をせばめ、ゾウ問題の初期の議論によくみられた危機的な雰囲気をやわらげるのに役だち、また、より効果的な方向へ将来の研究を導く指標を提供するものだと思うのである。わたしは、ただ単に、ゾウの社会生活の表面をかいなでてみはじめたにすぎないが、わたしたちは、ゾウの社会組織の主要な特質の二、三を明らかにし、また、ゾウの個々の性格と気質の驚嘆すべき多様さを少しばかり認識しえたと確信する。

イアン・ダグラス－ハミルトン

（1） ボドレアン図書館は一四五五年に創立されたオックスフォード大学の図書館で、イギリスでは、大英博物館につぐ規模をもつ。

（2） 原タイトルは East African Wildlife Journal.

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook